

平清盛とお金

公認会計士としても作家としても活躍されている山田真哉さん。今回は、あの歴史上の人物と貨幣についての興味深いお話です。

今回のテーマは「平清盛とお金」である。

いったいなぜ、『くらし塾 きんゆう塾』で平清盛をとりあげるのか、疑問に思われる方も少ないだろう。

これは、単にNHK大河ドラマのブームに乗っかろうとか（実は私、このドラマの制作段階から経済に関する助言などを行っている）、私が平清盛関連の本も書いたことがあるからだとか、そんな軽い気持ちで決めたことではない。

さかのぼること二年前、このエッセイがスタートした当初から「連載のうち一回は平清盛について書かせてください」と担当編集者に宣言していた念願のテーマなのである。

なぜ平清盛が

「お金の話」に登場するのか？

それでは、なぜ私がそこまで平清盛のことを書

きたいと思っていたのか？

端的にいうと、「私が神戸の出身だから」である……といわれても、分かりづらいのは無理もない。世間一般における平清盛のイメージといえば「天皇家をないがしろにし、源氏をいじめ、庶民に対しては恐怖政治を敷いた、凶暴で強欲な大悪人」といったところだろう。しかし、神戸市民のもつイメージはこれとは180度違う。なぜなら、平清盛は神戸港を「地方のよくある港」から「世界でも有数の国際貿易港」へと変えた英雄だからである。さらに、一時的とはいえ首都を京都から神戸に移してくれた大恩人でもある（1180年の福原京遷都）。

そもそも、世間一般の平清盛に対する悪役イメージは、その出所のほとんどが『平家物語』、つまり源氏方が作ったフィクションをもとにしたものであるから、当の清盛にとってはとんだ冤罪である。

山田 真哉

やまだ・しんや

公認会計士・税理士。1976年兵庫県神戸市生まれ。大阪大学文学部史学科卒業。大手監査法人を経て、現在、会計事務所所長。企業のCFOや政府の委員、経済ドラマのプラン等も務める。

代表作は160万部突破の『さおだけ屋はなぜ潰れないのか?』など。会計ミステリー小説『女子大生会計士の事件簿』はシリーズ100万部を突破し、TVドラマも放映された。現在、NHK総合『ゆうどきネットワーク』『ビジネス新伝説 ルソンの壺』、BS11『ベストセラーBOOK TV』などにレギュラー出演中。最新刊は、歴史経済ミステリー『経営者・平清盛の失敗』。



あれこれ述べたが結局、ひとえに私自身が「平清盛が大好き！」というのが、今回の記事を書くとした最大の理由である。しかし、もちろんこの連載エッセイのタイトルが『会計士のやさしいお金の話』であることを忘れたわけではない。

「平清盛」と「お金（銭）」は、実は密接な関係にある。清盛の活躍した平安時代末期は日本経済史上において極めて重要な時代、つまり、それまでの絹や米といった「モノ」をお金の代わりに使う経済から「貨幣」を使う経済へと、社会を二変させた時代なのである。

——さて、この説明を聞いて、あなたは果たして「ふむふむ、なるほど」と納得しただろうか？ だとしたら、もう一度、学校の授業で習ったことを思い出してほしい。

日本で最初の貨幣といえば、奈良時代直前に生まれた「和同開珎」である。若い方なら、「それより前に富本銭が作られた」と習ったかもしれない。このように、平安時代より前からすでに日本には貨幣があったにも拘わらず、平安時代末期に「絹や米といったモノを使う取引から貨幣を使う取引に変わった」というのはどうもオカシイ……と疑問をもって当然なのだ。

では、この疑問についてタネ明かしをしよう。実は、和同開珎などの貨幣は平安時代の途中ですっかり廃れて、世の中から姿を消していたのだ。大河ドラマで清盛の少年・青年期をご覧になった

方なら、商売や博打のシーンに銭が決して出てこず、絹や米といったモノで取引がなされていることに気づいたかもしれない。

こうなると、当然、次の疑問が出てくる。果たして和同開珎などの貨幣は、いったいどこに消えたのだろうか？

日本初の貨幣「和同開珎」はどこに消えた？

西暦708年のこと。日本の朝廷は、当時中国で普及していた銅製の貨幣にならって「和同開珎」を発行した。そして、この貨幣発行で得た利益も

使って、710年に新しい都が造られる——それが、「平城京」である。奈良時代はこうして幕を開けた。

その後は偽造対策などの理由で「万年通宝」や「神功開宝」といった貨幣が作られる（和同開珎を含めると12種の貨幣が作られたため、「皇朝十二銭」と呼ばれる）。しかし、近畿地方を中心に流通したこれらの貨幣も、平安時代前期には廃れはじめ、958年の「乾元大宝」を最後に、新たな貨幣が作られることはなくなってしまう。（次に日本で全国的な流通貨幣が作られるのは、江戸時代まで待たなければならぬ）

では、日本の古代貨幣はどうして廃れてしまったのだろうか？ シンプルに説明すると、次のような流れになる。

- 1 平安時代、貨幣の原材料である銅が枯渇して採れなくなった
- 2 少ない銅に鉛などを混ぜ、むりやり新貨幣をつくった
- 3 (旧貨幣に比べて) 見た目も素材も悪くなったことで、人々の新貨幣に対する信用が低下した
- 4 取引で「新貨幣の使用はお断り」というケースが増え、使いづらくなった

これを繰り返した結果、貨幣自体が使われなくなったのである。取引の場で拒まれると、貨幣は一気にその存在意義を失ってしまうのだ。



これと似たようなことは現代でも起こりうる。私がひそかに愛してやまない紙幣「二千円札」も、「信用」に問題があるわけではないのに、発行当初に自販機や券売機で使えなかったことが未だに尾を引いている。

「受け取ってもらえるかどうか——それが、貨幣流通の運命を大きく左右しているのである。

経済史上最大のミステリー 「宋銭普及」

平清盛の活躍した時代に、日本が日宋貿易でも多く輸入していたもの、それは「宋銭」——つまり、中国でつくられた銅銭であった。日本に大量に流入した宋銭は、それまでの絹や米に代わって、日本の通貨として急速に普及していった。それも、朝廷や幕府の後押しは一切なく、あくまでも民間レベルで普及していったのである。

それ以後、実に戦国時代までの約400年間、日本では宋銭が通貨として使用されることになる。どうして日本で、宋銭という「外国貨幣」が「急速」に普及したのか——この謎は、日本経済史上最大のミステリーといわれている。

この謎に迫る仮説はいくつかあるが、一般的には「宋銭は国際的に通用する貨幣だったから日本でも受け入れられた」という説が知られている。これを「国際通貨説」としよう。確かに、宋銭は東アジアのみならず、東南アジアやペルシア、アフリ

カ方面でも使用された形跡がある。

しかし、同時期の朝鮮の統一王朝「高麗」では宋銭はほとんど流通しておらず、米や布を使う取引が行われていた。また、他の東アジアの国々をみると、宋銭が流通した国では決まって自国の独自通貨が併せて使われていた。つまり「自国の通貨が廃れていたのに宋銭だけが普及した」という日本の特異な状況は「国際通貨説」では説明がつかないのだ。

他の仮説もある。「社会全体の生産力が向上した結果、余剰の生産物ができたが、これらを交換・流通させるためには絹や米を使った取引では不便だったため、金属貨幣が強く求められた」というもの。しかし、貨幣が流通するためには、共同体の構成員の大半がそれを通貨として信用しなければならぬ。単に「便利なものだよ」というだけで、当時全く廃れていた貨幣の価値を大勢の人々が信用するの难道か疑問である。

ではどうして、当時の日本人々は宋銭を信用したのだろうか？

「末法思想」が貨幣経済を生んだ

ここで注目したいのが、そもそも宋銭が日本に輸入され始めた経緯である。

当時、写経をした紙や巻物を入れる「経筒」という筒があった。最近の調査によると、経筒の素

平清盛とお金 ¥ 連載エッセイ 会計士のやさしいお金のお話

第4回

材である銅の産地が1150年ころを境に国内から中国華南地方に切り替わっていたと推定できることが分かった。ところがこの時代、宋は銅の輸出を禁止していたという——もう察しがついた方もいるだろう。銅不足に陥った日本は、銅そのものを輸入する代わりに銅製の宋銭を大量輸入し、溶かして銅材として使用し始めたのだ。なお、その百年後にできた鎌倉大仏の材料も宋銭だといわれている。

そして、「この大量の宋銭を、日本で通貨として使用できないか？」と最初に目をつけた人物こそ、平清盛である。その最大の目的は、権力の象徴である通貨発行権を手に入れることである。

貨幣が廃れて久しい当時の日本でも、宋銭を人々に通貨として信用させ、流通させることは可能だ、と清盛は判断した。その根拠は「仮に通貨として使えなくても仏具になる」という独特の利権価値であった。宋銭を数百枚集めれば、経筒ができる量になったのだ。

当時は、末法思想の真つただ中。西方極楽浄土への憧れは、貴族・庶民間わず大変なものがあった。その中で宋銭は「浄土に導く仏具のカケラ」として使われていたため、実際の銅の素材価値以上に、信仰物としての信用が与えられていたのだ。「外国貨幣」であるにも拘わらず、宋銭が通貨として普及した背景には、このような日本人の信仰心が反映されていたのである。